

茗溪

新春特集

- I 筑波大学スポーツの明日へ
- II 「ふるさと」は仰角30度に

グラビア：01

新年の挨拶 筑波大学長 山田 信博：02

新しい年を迎えて

茗溪会理事長 西野虎之介：03

特集I 筑波大学スポーツの明日へ：04～08

特集II 「ふるさと」は仰角30度に：09～12

「図書館学校」創設90周年記念事業を多彩に開催

図書館情報学橋会 森 茜：13

第10回（平成23年）茗溪会顕彰：14～15

茗溪会 秋の公開講座から：16～17

絶滅を生き延びた生物

筑波大学准教授 上松佐知子

平安時代の英語は面白い

筑波大学名誉教授 藤原 保明

東京・芙蓉会公開講座

高坂節三先生をお迎えして：18

平成23年秋の叙勲 おめでとございます：18

桐の葉のつどい：19

茗溪学園だより：20

追悼録：21

告知欄：21

本部だより：22

編集後記：22

meikei

正月
2012
No.1072

筑波大学スポーツの明日へ



筑波大学
山田信博学長



茗溪会
西野虎之介理事長

P. 2～3 参照

新春のご挨拶



茗溪学園上空より
筑波山を望む

ふるさととは仰角30度に



平沢官衙遺跡で秋祭「つくば物語」

広い平野の北にそびえる筑波山は、歴史的にも古くから人々に親しまれており、どこからも筑波山の雙峰を仰ぎ見ることができる。だから、「仰角30度のふるさと」だ。筑波地域の「ふるさとづくり」を訪ねた。

P. 9～12 参照



茗溪学園の農業巡検

茗溪会顕彰

茗溪会は社会貢献活動を顕彰、今年は6団体と5人でした。

P. 14
～
15 参照



「矢中の杜」公開

新年の挨拶



国立大学法人筑波大学長

山田 信博

大学の機能強化

大学の機能はいうまでもなく教育と研究にあり、育成された人材や学術の成果は、社会基盤を整備し、国を活性化し、未来を創造します。今回の震災を通じて、改めて大学の使命を再認識し、私たちは大学をさらに活性化し、大学の大事な機能である教育・人材育成や学術の成果を通じて、大学機能を力強く発揮させることにより、被災地の復興を応援し、日本の活力の再生に貢献する役割を果たさなければならぬと強く感じています。さて、米国では富の格差が拡がり、フェースブックを通じて、その格差や金融界に対する抗議がウォールストリートにおけるデモや占拠の形で現れ、全米へ拡がりをみせています。その背景には若者の就職率の低下が一向に改善されないことに対する、若者の強い怒りがあるといわれています。大学を卒業しても就職口がない事は、若者が人生設計において大学に入り、勉強しても、その身につけた能力を実際に社会で役立てることができないという不条理であり、さらに一歩進んで、若者が大学の価値を見出しにくいという状況を、次第に生み出しつつあるように危惧せざるを得ません。特に授業料が高く、その返済に負債すら抱えている若者にとっては、強い苛立ち、抗議行動として現れているようです。このような米国の抱えている授業料の高負担、就職率の低下という社会状況に改善の兆しが見えないという将来への不安は、格差社会となりつつあるわが国においても、じわじわと拡大しつつあると言わざるを得ません。大学への進学希望は総じて強いものの、我が国の経済状況からして、教育への家計負担は相対的に大きくなり、就職状況も年々厳しさを増しています。一方、大学への国からの予算は先進国では最低のレベルにあり、教育・研究の向上や社会貢献に利用できる資源の制約は限界に達し、大学運営に余裕は少なくなりつつあります。この知識基盤社会の危機的状況の中で、余裕を生み出し、大学機能を強化し、若者たちにとって魅力ある大学像を提示する必要があることは言うまでもありません。

変化の時代に対応する バージョン・アップ

大学は今日の知的社会や科学技術の進歩の基礎となっています。IT革命などを例にとっても、現代文明における大学の果たしてきた役割は明白です。大学は若者たちの能力や才能が最大限に発揮されるように、長い歴史をかけて育てられてきた人類の叡智の賜物ともいえるべきものです。そこでは、若者たちの知的好奇心が満たされ、若者たちが自ら未来を切り拓く能力を養うことになりました。学生の視点から見ても、大学はいつまでも若者にとって、未来への魅力ある創造的、知的活動の自律的拠点であってしかるべきです。その意味では、教育の充実とともに、高いレベルでの個性豊かな優れた研究の展開は若者の想像力へ大きな刺激となり、高い研究力や若い研究力が、さらに教育の充実へと連鎖、共鳴する仕組みがとって大切で、資源に制約のある苦しい時代ですが、大学の大きな社会的意義を認識しながら、大学の存在意義を長期的視点から見つめなおし、何よりもゆとりを生みだし、その社会的使命を果たさなければなりません。

グローバル社会においては、地球規模課題である環境問題、エネルギー・資源問題、人口爆発や少子高齢化の問題、格差の問題、民族紛争などに対する解決策の提示に、大学が大きな役割を果たすことを期待されています。しかし、大震災を通して明らかになったように、多くの課題が山積みとなっている現実を直視すれば、地球規模の課題解決のために、より積極的に貢献できるよう大学システムのバージョン・アップが求められています。本年度からリーディング大学院や国際展開事業など新たな取り組みが始まります。年末には新病院が竣工の予定で、本年度から新しい教員組織である系が、本格的に活動し始めます。その自立的運営による本学の実質的なバージョン・アップにご期待いただくとともに、本年もどうぞよろしくご指導ならびにご支援をお願いいたします。

あけましておめでとうございます。昨年度の大震災に際して、皆様より多くのご支援、ご声援をいただきましたことに對して、心から感謝申し上げます。

今回の大震災は国民の貴重な財産である大学にも大きな爪あとを残しました。震災後の状況ですが、教職員の懸命の復旧作業により、大学機能はおおむね回復することができました。一方、大きな被害を受け、いまだ復旧に至っていない部分もあります。大学会館については、昨年度は損壊により卒業式を実施できませんでした。今年に入学期、卒業式に間に合わせて、復旧する予定となっています。大きな損壊でありました体育館、加速器については新設になりますので、これから着工ということになります。

昨年になりますが、各方面のご支援もあり、旧東京教育大学校舎が本学の新たな東京キャンパスとして新築され、生まれ変わりました。是非、お立ち寄りください。

新しい年を迎えて



社団法人
茗溪会理事長

西野 虎之介

新しい「法人」として

これから始まりますこの一年は、私どもの茗溪会にとりましても、大きな転換点に立つ一年でございます。

すでにご案内のように、国立大学法人筑波大学の同窓会であります私たちの茗溪会が、今までの民法によります「社団法人」から、平成20年12月1日に施行された公益法人関連三法に基づきます「一般社団法人」に、この4月新しく生まれ変わることになるため、昨年末、新定款案を内閣府に提出いたしました。

部内的には、今年5月に開催致します代議員（社員）総会にお諮りし、そこでご承諾をいただくことにより「新法人」として機能して参ることになります。

一方、財団法人筑波学都資金財団は、一般財団法人として新しい出発点に立つことを目指しております。

同時に、学校法人茗溪学園を含めます三法人は、今まで長い間、茗溪会の理事長がすべての理事長を兼ねておりましたが、それぞれに理事長を置き、副理事長と常務理事、事務局長職を設ける体制をとることになりました。また、そうすることによって今まで以上に、筑波大学を取り巻く全国的な同窓生のネットワーク、紐帯の強化につながる「絆」が、一層確かなものになると存じます。

夫々に、組織の理念、建学の精神の確立を

茗溪会は、百四十年に及ぶ長い歴史の中で創基された組織でございます。日本が近代化を図る上での指導的人材育成に寄与して参ったことは、先輩各位の業績として、後を継ぐ私どもの誇りうるところであろうと存じます。

また、筑波大学が、東京・大塚のキャンパスを離れて茨城県筑波の地に移ることによって、日本の過去にも例を見ない大規模な総合大学としての内容を備え、新しい研究、教育機関として設立され、それも既に40年を迎えようとしております。

そのような中で、筑波学都資金財団は、同大学に籍を置く内外の学生方をはじめとした方がたの教育環境に十

分配慮した学生宿舍の管理運営をするために、当初、大学当局の要望を受けて設立し、併せて、宿泊可能な研修センターを併設して参ったのでございます。

しかし、新しい組織となった同財団も、その組織の設立の理念を再構築することによって、一層の自立性を高めることが内外から求められております。

一方、現今の社会におきまして、ハイレベルの質や内容を持つ中等教育機関が、公私ともに求められております中で、茗溪学園への社会からの期待度が一層高まっております。それを、学校経営という視点から検討してみますと、30余年に及びます学園の歩みは、校舎の拡張、建て替えなど、もう一段の飛躍が求められております。さらにこの度、茗溪会が筑波に所有する農地を茗溪学園に提供することとなり、その教育的効果が期待されているところでございます。

また、高大連携という側面から見ますと、今までに大学当局からお示いただいた実績に併せて、内容面の一層の充実という期待に応えることが、私たちに課せられた務めであると考えているところでございます。

さらなる飛躍のために

東日本大震災によって、国家的規模で新しい出発が求められておりますことは自明の理でございます。

それに対して、筑波大学の同窓会である茗溪会や関連する組織の抱える諸問題は、明日の日本、国際社会の指導的人材を育成するという筑波大学の建学の理念に鑑みましても、これは、国民的な大きな課題として、私ども関係者が正面から向き合うことになるものでございます。しかも、これらの課題の解決と新しい出発は、全国の同窓の皆さまの一人おひとりのお力添えがなければ、所詮は「絵に描いた餅」に終わるのでございます。実のある成果を上げることこそが必要なことと存じます。

更なる飛躍のための再建の槌音は、被災各地をはじめ各組織で大きく高く鳴り響いております。

どうぞ、関係各位の絶大なるお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

新しい出発点に立つて

昨年の東日本大震災後、初めての新年を迎えました。被災現場では、被災者の生活の再建や再出発に合わせ、瓦礫の処理や港湾の整備、復元、居住地の復興、また、原発事故への対応、依然として行方不明のままの方がたの探索をはじめ、生産拠点和新しい生活基盤の確立等と、あまりにも大きな国民的課題を抱えての新年を迎える今年ではあります。

一方、母校・筑波大学での、被災した施設、設備の復興、また、被災支部関係の地域、職域やその被災会員に對しまして、他の支部からの支援や義援金の拠出をいただきましたが、これらの方がたには、本當にご協力を賜りまして心からお礼を申し上げる次第でございます。

本部と致しましても、当該会員の会費減免等、当然のこととは申しますものの、微力ながら配慮させていただきましました。この機会をお借りしてご報告申し上げます。

鼎 談

筑波大学スポーツの

明日へ

奮い立たせた原動力

フジヤマの「飛び魚」古橋と橋爪が世界記録を次々に更新するという快挙を遂げてくれましたので、当時の日本人はどれほど元気をもらったことか。日本ばかりか世界が驚きました。

江田 今年がロンドンオリンピックの年ですね。

山口 日本中のスポーツ界の関係者は、各団体、選手とも大変な努力をしております。

阿江 その中には当然、筑波大学関係者も入っております。念のためにひとこと――。

江田 日本中と言いますとね、終戦直後の日本は敗戦国ということ、当時開催されたロンドンオリンピックへの出場はかなえられなかった。なにしろ、敗戦ということの上に、国内が精神的にも物質的にも、国全体があらゆるものが疲弊しどん底に落ち込んでいたものでした。

それではということで、ロンドンオリンピックと同時期に、日本国内で全日本水泳選手権大会を開催しようということになりました。

そうしましたら、フジヤマの「飛び魚」古橋と橋爪が世界記録を次々に更新するという快挙を遂げてくれましたので、当時の日本人はどれほど元気をもらったことか。日本ばかりか世界が驚きました。

阿江 昨年は、東日本大震災が起きるなかで『なでしこジャパン』が、女子サッカーで世界一になりました。

いま、江田先生が言われた敗戦後の日本を奮い立たせた原動力と同様に、スポーツが大震災後の日本再起の原動力の一つになっていると思いますね。勿論、震災後の日本人の整然とした対応の姿には、世界中が驚くほどだったということは勿論ですが、スポーツがこれほど、人の心を奮い立たせる原動力になったことに改めて、驚きました。

山口 なでしこジャパンに対しては、早速に「国民栄誉賞」が授与され、続いて『紫綬褒章』が贈られました。これには、国民的な賛同が見られたことに合わせて、選手をはじめ関係者一同も慶ばさせて頂きました。

阿江 昨年の『茗溪』秋号が「筑波大奮闘」と題して、女子サッカーが健闘した記事で、世界柔道選手権大会からの報告と共に速報して下さってありがとうございました。

(注・秋号No.1071・P.12-13を参照されたい)その「なでしこ」のメンバーの中に、重要な位置で活躍した、わが筑波大学の二人の選手が入っていました。安藤梢選手と熊谷紗希選手の二人です。

江田 そうなんです。当時は「なでしこ」の名前ばかりが前に出ている中で、わが母校の選手、しかも、いま阿江さんが言われたように、重要なポジションで活躍した二人がいたわけですね。



江田 「敗戦後、世界の“飛び魚”古橋と橋爪が世界を驚かせた」

阿江 「東日本大震災の後『なでしこジャパン』が世界一になりました」

昨年の日本は、東日本大震災で日本国民をはじめ世界中からの激励や支援で再起に向けての力をもらった。“人間”の絆の強さと有難さを実感したもので、いまだにその興奮は収まらない。

また、それを補って余りあるほどの力を『なでしこジャパン』からももらった。この感激と興奮は忘れない。

この力を今年のスポーツ界はどう受け止め、どう発揮するのか。

茗溪会副理事長の江田昌佑氏に話の進め役になって頂き、筑波大学体育専門学群長の阿江通良氏と筑波大学大学院准教授の山口香氏に話し合ってもらった。

(発言者・敬称略)



えだまさすけ
江田昌佑

大阪府生まれ
四条畷中学(旧制)でラグビーを始めた

- 大学卒業後、東京の私立・城北高校でラグビー部を指導して日本一へと導いた

鹿屋体育大学長としてトップアスリートサポートシステム(TASS)を創設し、柴田亜衣選手がオリンピックの水泳800mで金メダルを獲得する素地をつくった

- 筑波大学名誉教授鹿屋体育大学名誉教授
- 社団法人茗溪会副理事長

山口 “なでしこ”は、確かに、国民に夢と希望を与えてくれました。でも、悔しいことに新聞もテレビの画面でも“筑波大学”のことをあまりアナウンスしてくれませんでした。そこが少し残念なことでした。

二人にはロンドンでの活躍が期待される

このボールは、大学に永久保存されることになりました。

大学院在学中の安藤選手は測定評価学を研究しており、本学のクラブに、学群3年生の熊谷選手は埼玉のクラブに所属していますが、安藤選手の影響を受けながら成長しました。

阿江 当大学関係者の安藤選手と熊谷選手は帰国して早速、母校を訪問してくれまして、山田学長に優勝報告をすると共に、サイン入りのサッカーボールを記念として手渡してくれました。

このボールは、大学に永久保存されることになりました。(本誌『茗溪』秋号No.1071グラビアページを参照されたい) 大学院在学中の安藤選手は測定評価学を研究しており、自分たちが立てた戦術能力を測定するなど、科学的で冷静な準備も怠らないようです。

また、学群3年生の熊谷選手は安藤選手の影響を受けながら成長しました。しかし、安藤選手は本学のクラブに、熊谷選手は埼玉のクラブにと、二人は異なったクラブに所属しています。特に熊谷選手は将来が期

待される者として、西嶋教授に指導を受けておりました。

山口 二人はロンドンが期待されていますね。

江田 昨年の世界柔道パリ大会では、七つのメダルを取りましたね。この選手たちは、ロンドンに向けて十分な準備をしているでしょうね。

山口 昨年の柔道では、日本代表に男子が14名、女子が14名選ばれましたが、そのうち、10名が筑波大学関係者でした。その選手たちが七つのメダルを取れたということは、今年のロンドンも十分に期待が持てるということですね。

でも実は、大学内でも女子は男子ほどには恵まれておりません。柔道の女子はいつも勝っているのに、金メダルを取っても話題になりませんが、“なでしこ”の場合は、全国的に話題になって“女子”が印象づけられて嬉しかったですね。

柔道の場合、世界大会では各階級で各国から二名が出場しますが、オリンピックには一名ですのより厳しくなります。しかし、この中に本学関係者が選ばれれば、優秀な成績が得られると思います。ですから、本学関係者から一人でも多くの選手が選ばれて欲しいと願っております。

江田 本学の昨年活躍したアスリートたちは、陸上リレーでは斉藤選手と安孫子選手、女子の陸上では佐野選手が、ラグビーでは慶応大学や早稲田大学に勝ちました。特に、早稲田大学との対戦では、三十数年ぶりの

技あり



30数年ぶりに早大に勝利



打った!





あ え みち よし
阿江通良

兵庫県生まれ
専門分野・スポーツバイオメカニクス

- ・スポーツ動作や技術のバイオメカニクスの分析
- ・バイオメカニクスデータの指導への活用法、動きの質的分析などの研究

現役時代の専門種目・陸上競技の走高跳

現在・日本陸連科学委員会委員長、日本オリンピック委員会科学サポート部門委員、日本バイオメカニクス学会会長

- ・筑波大学体育専門学群長
- ・社団法人茗溪会理事

勝利でした。

阿江 エアロビックでは諏訪部選手が優勝しましたね。女子のテニスでは石津さん、男子バレーでは身長2メートルの出来田君も頑張っています。それに剣道でも男女共に学生選手権を獲得しました。

筑波大学のスポーツも活気を取り戻して来ました。

新しいスポーツ基本法の制定

いま、子どもたちのスポーツ活動の現状は、活躍している子どもがいる反面、一週間で60分しか運動をしていない女子中学生が沢山いる等と二極化が見られます。そういう点を踏まえ、大学の研究を含めて推進していくことが重要だと思います。

江田 昨年、新しいスポーツ基本法が成立しました。

これはわが国にとって、スポーツの新たな出発点になろうかと思っています。

スポーツ発展のために大いに期待出来ることではないでしょうか。

阿江 以前の振興法は、1961年に生まれました。50年経って、新しいスポーツ基本法が生まれたわけですし、そのポイントは三点です。

その第1点は、スポーツ振興のための基礎的な条件整備を図ろうということです。それは指導者養成、施設の整備、事故対応等です。また、科学的研究を重視

しようということにもなっています。

第2点は、クラブ組織のような仕組みを強化して、地域スポーツを盛んにしようということです。

第3点として、競技スポーツを盛んにしてコミュニケーションの活発化を図るという好循環を生み出し、国民の一体感ひいては立派な国民、国を創ろうということです。

また、これらの方針を受けて、大学としても、指導者の養成、スポーツでの大学が果たす役割の再検討や、また、基本法の理念に合う「スポーツ」の方向性の再構築や大学の活用 of 新たな視点の模索を進めるということを強力に行っていきたいと思っています。

山口 スポーツ基本法が出来て、そこには地域性の重視ということも見えてきましたので、その運用の方向を見つけて行きたいと思っています。

実は、私が理事をしておりますJOCには、30人の委員がありますが、その中で女性の委員は3人です。

これは、競技人口の差かなとも思われますが、それだけに、少ないからこそ牽引は女子が果たさなければならぬものと思いますし、女性のイニシアチブでこそ、地域や市民のスポーツへの支持も得られ、スポーツ自体もまた、伸びるのではないかと思います。

いま、子どもたちのスポーツ活動の現状は、活躍している子どもがいる反面、一週間で60分しか運動をしていない女子中学生が沢山いる等と二極化が見られます。そういう点を踏まえ、大学の研究を含めて推進して

ジャンプシュート



ラート競技選手権



ブロックに跳ぶ



いくことが重要だと思っています。

阿江 原発被害の影響で、幼児や小・中学生等が屋外での運動が出来なくなっただけではありません。

江田 新しいスポーツ基本法を受けて、いま山口さんが言われたように、具体的には、女子が牽引車の役割を踏まえることの重要性を再確認しながらも、阿江さんが言われた「大学の立場」から、具体的な動きがあるということですが――。

筑波大学スポーツアソシエーション (TSA) の設立

理念としては、トップアスリートチームの育成および全学的なスポーツ振興を支援するためのものです。

筑波大学の体育・スポーツ科学の資源を活かし、スポーツに留まらず、関連する教育分野の活性化を図ります。また、大学と地域との一体感の醸成を目指し、スポーツを通じた多角的提案を実践します。

阿江 筑波大学では昨年、筑波大学スポーツアソシエーション (TSA) を設立して、その概要を発表しました。

理念としては、トップアスリートチームの育成および全学的なスポーツ振興を支援するためのものです。

筑波大学の体育・スポーツ科学の資源を活かし、スポーツに留まらず、関連する教育分野の活性化を図ります。

また、大学と地域との一体感の醸成を目指し、スポーツを通じた多角的提案を実践します。――ということで、次の5つの事業を推進します。

・運動部の強化事業 運動部の強化及び全学的スポーツレベル向上方策の構築と施策の実施、科学的、医学的サポート体制の充実

・アスリートサポート事業 学業相談、栄養、心理、メディカル等のコンサルテーションの充実

・教育研究支援事業 2トップスポーツ資源を活かす関連分野への協力、既存の領域を越えた交流の促進

・社会貢献事業、健康支援事業 2教育研究成果の還元によるスポーツ教室等の開催や健康支援 (運動部、トップアスリート、コーチ等)

・情報発信、広報事業 2インターネットによる情報発信、応援観戦ツアー等の企画、実践、観戦チケット情報の配信

―― 以上のような事業に努めることになりました。

山口 筑波大学には「力」はあるのですが、それだけに「まともでない」と思われるのです。「TSA」のスタートはOB、OGと現役が一体となつて一つに結ばれることが必要だと思います。それには「若溪会」の存在が必要で、むしろ大切です。その会員である先輩各位の協力が望まれるところです。

そうすることによって、「大学益」に叶うスポーツになつてほしいものです。他の大学とも頻繁に試合をするなどして、もつとTSAが機能するようにしたいものです。



やまぐち かおり
山口 香

東京都生まれ
元女子柔道選手
現在・全日本柔道連盟国際委員 JOC 理事
全日本柔道連盟六段

- ・1978～1987年 全日本体重別選手権10連覇
- ・1980年以来世界選手権銀メダル4回
- ・ソウルオリンピック女子柔道銅メダル (当時は公開競技)、世界選手権金メダル等を獲得
- ・女子柔道界軽量級の黎明期の牽引的な選手だった
- ・筑波大学大学院体育科学系准教授

ひたすらゴールに！



シュート！



試合開始！



チーム「ニッポン」 マルチサポート事業の観点から

筑波大学が各大学の幹事校となっており、前身在校時代には、大いに活躍した箱根駅伝の復活も、5、6年の準備期間をかけて再度の出場を目指したいと思っています。

柔道では世界のトップアスリートが、年間200人ほどが来日して一緒に励んでおりますし、交流試合をしております。

山口 よく、優秀な選手は一般的には「天性」があるといわれがちですが、その上、努力を重ねれば、その種目のハイレベルを保てると思います。努力は当然重ねなければならぬのですが、天性だけでは早く脱落してしまいます。科学的、客観的に自分を見つめ直



山口 「優秀な選手は天性の上に努力を重ねることが重要です。天性だけでは早く脱落します。科学的、客観的な自分を見つめ直す視点を持って、冷静に分析、再構成を図ることが必要です」

すという視点を持って、冷静に分析、再構成を図ることによって、技量がもう一歩前進するのだと思っています。

阿江 文部科学省チーム「ニッポン」マルチサポート事業という観点からも、筑波大学が各大学の幹事校となつて行かなくてはと思いますし、前身在校時代には、大いに活躍した箱根駅伝の復活も、5、6年の準備期間をかけて再度の出場を目指したいと思っています。

もう一つ、スポーツを、すべての人の生活活動の共用のベースにするということが現代人は求められていると思うのですが。例えば、ゴルフをするとか卓球やボーリング、子ども野球や子どもサッカー、子ども相撲等は既に日常的になっておりますね。

江田 そうですね。それには、筑波大学をスポーツの総合的な拠点にしたらと思います。また、教育、研究を含めて、研究者、指導者のコミュニティになればと思います。

先程、山口さんも指摘されたように、私もOBやOGも、茗溪会の新法人化の歩みと合わせて積極的な協力を惜しまない方向を探らなくてはならないと思います。

阿江 少し具体的な話になりますが、わが大学のユニホームカラーは、いまはばらばらですが、必ず地色は「筑波紫と筑波ブルー」を、マークは「桐の葉」に統一すること等からは是非、実施して行きたいと考えております。

山口 他の大学と試合を頻繁にしたいという話を出しましたが、柔道では世界のトップアスリートが、年間200人ほどが来日して一緒に励んでおりますし、交流試合をしております。その場合、この人たちの宿泊面でのサポートを一層図って頂きたいものです。現在でも、江田先生の関係されておられる研修センターにも大変お世話を頂いておりますので、活用させて頂いております。

江田 いや、いままでにもまして、今後こそ一層の協力を惜しみませんので、大いに活用して下さい。むしろ、こちらからお願いをしたいところです。

ロンドンオリンピックを見通して

JOC理事の立場としても、チームジャパン、チーム筑波として頑張ってもらいたいです。選手もサポート陣も筑波大学関係が多いのが現状です。このことは、選手にとっても心強いと思います。

江田 筑波大学関係の、ロンドンオリンピックでの活躍の予測はどんなものでしょうか？

阿江 男子バレーと7人制ラグビーで何人かが選手として選ばれると思います。バドミントンの混合ダブルス等も可能性が見込まれますね。パラリンピックは、大学関係から選手が7、8名、コーチが数名出かけると思われます。

山口 柔道は、男子はOBと現役で1つの枠を競っている階級もありますが、有力候補としては、男子で4、5人、女子で3人くらい。男子では現役に期待が持てそうですね。

JOC理事の立場としても、チームジャパン、チーム筑波として頑張ってもらいたいです。選手もサポート陣も筑波大学関係が多いのが現状です。このことは、選手にとっても心強いと思います。

柔道のみならず、筑波関係から多くの選手・スタッフがロンドンオリンピックに参加すると思いますので是非、大会前には、筑波大学や茗溪会関係でも、組織を挙げて激励の会を開いてもらうと有難いですね。

江田 大いに盛り上げたいものですね。

お二人には、今日は長時間に及んで興味深いお話を頂きまして有難うございました。

今後とも、筑波大学の発展と茗溪会との絆を一層強めて行くことにお力をお貸し下さい。

(本文中の写真の一部には武田 理氏の作品を、また、取材場所の整備には、学群秘書の生井京子さんのお力をお借りしました。)

「ふるさと」は仰角30度に

筑波の街の地域づくり



自分が生いたち生活している地域を、「ふるさと」と感じるとき、その意識を地域の人々と共有することで、地域社会はより強い絆によって結ばれる。そのような「ふるさと」意識の共有の核となるものが、どこの地域にもあるような気がする。「ふるさと」のシンボルといってもよい。ある地域ではそれが川であつたり、海であつたり、また山であつたり、つまり「田なる大地」そのものではないだろうか。

茨城県筑波の地では、行政区画としてのつくば市に関わりなく、広く一帯に筑波山を「わがふるさと」のシンボルとして親しみを抱いている人々が多い。広い平野の北にそびえる筑波山は、歴史的にも古くから人々に親しまれており、神の山として古代では「歌垣」の行われた地であることもよく知られている。この広い平野では、どこからでも筑波山の雙峰を仰ぎ見ることができる。だから、「仰角30度のふるさと」なのである。

(写真は、「つくば物語2011」会場の平沢官衙遺跡、遠景に筑波山)

§…… 筑波研究学園都市の40年

筑波の地に研究学園都市が建設されたのは、1960年代の後半の時期だったから、すでに40年以上になる。日本の最先端の科学と技術をはぐくむ新しい都市として筑波研究学園都市が創出された。筑波大学もまた研究学園都市の中核施設として発足した。

この地域の人口増加は著しく、つくば市は現在20万人を擁している。この40年のうちに流入した人口の多くは、いうまでもなく研究学園都市に関わる人々である。街並みもまた一変し、縦横に貫通した道路を軸に区画された

全く新しい都市が出現した。この地域に生活する人々は、研究者であり、企業人であり、商業人であり、そして学生であり、その人々はいわば新住民として、この地域に住んでいる。

先祖代々この地に生活してきた人々にとってこの地域はもちろん「ふるさと」であるが、研究学園都市によって流入、しかも40年の歳月を経て、今や地域に根付いた生活を送っている人々にとっても、かけがえのない「ふるさと」となっていくことは間違いない。

これらの人々が、仰角30度の筑波山を仰ぎながら、「ふるさと」意識を共有していくために、この地域ではさまざまな取り組みが行われている。

§…… 伝統的な祭り新しい祭り

筑波大学にいちばん近い古くからある神社といえば、「一ノ矢天王」の名で親しまれる一ノ矢八坂神社がある。秋晴れの日、筑波大学一ノ矢学生宿舎から北東方面に大通りを歩いて行くと右側に大きな森が目に入った。境内には何本ものケヤキが鬱蒼と繁っている。平将門を討った藤原秀郷が弓矢を奉納したという故事もなるほどと思わせる神域である。宮司の高田重明さんにお会いしてお話を聞くことができた。

「県文化財に指定されていた大ケヤキは、この神社創建の頃から樹齢880年を数え、近年惜しくも倒れました。」神社では毎年旧暦6月7日に例大祭が行われ、その日「ニンニク市」が立つのでニンニク祭りといわれる。

「江戸時代、天明の大飢饉の時、村人が領主からニンニクの常食をすすめられたことに由来します。現在でも例大祭の日には神社から厄除けとして『ニンニクお守り(御霊蒜)』を頒布します。また境内にはニンニクの露店が立ち並び、筑波の人たちはもちろん、関東一円からたくさんの方が集まって賑わいます。」

宮司さんのお話はつづく。
「この神社には、昔は大洗や那珂湊、銚子などから、講を組んでたくさんの人たちがお参りにきました。海の神だからです。筑波が研究学園都市になって、研究者のカップルが結婚式を挙げたり、初詣、お宮参り、七五三など、節目節目にお参りいただくようになりました。実験動物の慰霊祭も行われるなど、科学の街との結びつきは強くなって賑わっています。」

林の中を着飾った子どもたちを連れた家族が、何組も訪れて来る。七五三である。筑波の新住民にとっても、なじみ深い地元の土産神となつていくようである。

このような伝統的な地域の祭りや行事に加えて、筑波では現代的な祭りが数多く試みられている。10月29日土曜日、つくば市北条地区を訪ねた。「筑波山麓秋祭り」と銘打って筑波の地ではたくさんさんのイベントが繰り広げられていた。つくば駅でもらった案内パンフレットによれば

ば、この日開かれていたイベントは、北条地区では「秋の北条市」「北条ふれあい館岩崎屋」など5カ所、平沢地区では「つくば物語2011」など2カ所、小田地区では、「古民家癒しの広場」など5カ所、筑波地区で3カ所、田井地区で5カ所、実に20カ所でさまざまなイベントがあった。音楽祭あり、コンサートあり、一人芝居あり、古民家公開あり、歴史散歩あり、工芸品や特産品の展示・販売ありで、さまざまな工夫のこらされたイベントである。これは、土曜、日曜を中心に約一カ月の間に次々と開かれ、多くの人々が集まってくる。

§…… 筑波山麓の秋祭り

「つくば物語2011」と題した催しは今年も開かれ、つくば市およびつくば市教育委員会主催のもと、現代的な新しい祭りとして定着してきた。

澄み切った秋空の中、10月29日のこの日、山形由美さんのフルート演奏や現代日本舞踊を中心にした音楽祭が



筑波山遠望⑤と平沢官衙遺跡⑦での祭り

§…… 地域の文化財の魅力を引き出す

場所で開催する機会をいただいているとうとう」とスピーチすると、広場いっぱい観衆から、一斉に拍手が巻き起こった。ここにも、参加した人々にとって「自慢のふるさと」があることを感じた。

平沢地区に隣接する北条の街並みを、青空と筑波の峰を仰ぎながら散策した。古くからの筑波町の商業の中心地として栄えたのが北条地区である。「人との交流による街の活性化」を目的に掲げて、街づくりの活動を盛んにしてきたこの地域である。江戸時代以来の古建築の「店蔵」の保存と公開、そこを利用したイベントがあり、店先で餅つきが行われていたり農産物や手芸品の販売があったり、がまの油売りの口上が演じられたりしていた。街を歩いて行くと「これよりつくばみち」と深く彫り込んだ大きな石柱が立っていた。古来、筑波山への参詣道の基点となっており、日本の道百選に選ばれている。その先で、門柱に「国登録有形文化財」の札のかかった邸宅に行き着いた。「矢中の杜」と名前が付いている。邸宅見学ツアーの案内もあるので入ってみた。近代和風住宅「旧矢中邸」である。ツアー時間ではなかったにもかかわらず気軽に案内をして下さったのは井上美菜子さんだ。

「昭和13年から戦争を挟んで15年かけてこの家を建築したのは、北条出身の建材の研究者であり事業家でもあった故矢中龍次郎氏でした。氏が亡くなったあと、数十年間放置されていたこの家を、私たちボランティアの者たちが



「つくば道」の道標

したの、北条出身の建材の研究者であり事業家でもあった故矢中龍次郎氏でした。氏が亡くなったあと、数十年間放置されていたこの家を、私たちボランティアの者たちが

開かれた。会場は平沢官衙遺跡（国史跡）の広場である。奈良・平安時代の常陸国筑波郡の役所（郡衙）跡で奈良の正倉院のような高床の倉庫群が発掘され、現在は3棟の古代の建物が復元されている。この会場に行くと、まず目に入るのは遠景にそびえる筑波山であった。会場入口には、いくつもの出店が並び、お団子やネギや梨など地元農産物が即売されている。まるで縁日のような風景だ。その雑踏の中で、ビニールの小袋に入った「古代米」を手渡された。配布してくれた人は、「この遺跡では古代の水田も復元されて古代米を作っているのですよ」と話していた。だいに持ち帰った。

遺跡の丘に立つてみると、広大な丘全体がよく手入れされた芝生に覆われ、水田も広がっている。その丘の斜面いっぱいにはたくさんの人が集まってきていた。

山形さんのフルート演奏にギターやバイオリン、ピアノの伴奏、遠く南米やスペインなど世界中の音楽が、澄んだ青空と広大な山々に囲まれた広い自然の中で流れていく。筑波山を仰ぎ見ながら歴史と現代が結びついたロケーションの中でこの祭りが開かれていた。

演奏する山形さんが、「この広いすばらしい自然と遺跡のなかで、心地よい風が吹いています。今年もこんな



上 北条ふれあい館・岩崎屋の店蔵
下 「矢中の杜」を案内する井上さん

§…… 「ふるさと」の祭り

現代でも、地域の祭りはその地域共同体の中心であり、「ふるさとづくり」のためにも祭りが企画されることが多い。筑波大学の学生が、そのような地域づくりのための祭りに取り組んでいる。その一例が、船山裕貴さん(社会学類3年)たちが企画している『ふるさとつくば ゆいまつり』だ。茗溪会では平成23年度の学生活動支援事業としてこれを取り上げた。

この祭りは昨年3月に開催を目指して準備を進めていたが、東日本大震災のために延期せざるをえなくなり、今年3月10日開催に向けて仕切り直して準備している。ゆいまつりのステージには、和太鼓やよさこいなどの活

掃除と修理をして再生しました。伝統的な和風建築をベイスにしながら龍次郎氏の研究成果が反映された独特の構造と材料が随所に見られます。例えば通気性を徹底的に配慮した構造や、皇族をお迎えできる高級な建材を使った迎賓空間もつくられています。」

井上さんは、筑波大学大学院で世界遺産学を学び、今は「NPO法人「矢中の杜」の守り人」の活動に専念している。

「私がこのことにのめり込んだのは、北条の街づくりのお手伝いをしていたことがきっかけです。学生など外部の者が地域のことに関わることは、地域の魅力的な資産なり環境なりの、地元の人にも気付かなかったような価値を再発見することにつながったと思います。地元の中には、『そんなものの何がいいのか』とはじめ冷淡だった人もいますが、私たちの活動を見ていただく中で、今では率先してPRの先頭に立っていただいています。」

井上さんは、地域の文化遺産の保存活用が地域の活性化にもつながると考えている。地元の人と一いっしょになつて創る「ふるさと」に自信を見せていた。

動を行っている、つくば市にゆかりのある団体に参加する。会場内に設置するブースでは、文化活動だけではなく、科学や芸術にスポットをあてた企画が用意される。フィナーレ企画では、国のふるさと創生事業をきっかけに作曲された「ふるさとTSUKUBA」にゆいまつりオリジナルアレンジを加え、出演者・来場者全員が踊りや演奏などで参加出来る「響け！ふるさとTSUKUBA」という企画を進めている。さらに、(株)シンブルウェイとの共同企画で、つくば市の名店・名産品ばかりを集めた飲食ブースの展開も予定している。

学生事務局を立ち上げ事務局長をつとめる船山さんは、この祭りのねらいを次のように話してくれた。

「つくば市は、学生や研究者、ニュータウンとしての住民、古くからの住民、留学生など様々な人間の住む街です。多くの知恵や力を持った人がいて、多くのコミュニティが点在しているのがつくば市の現状だと思います。コミュニティ間の交流を盛んにすることで、多くの反応が生まれ、研究学園都市つくばとしての特徴がさらに強まるのではないかと思います。『ゆいまつり』がそうしたコミュニティ間の「つながり」を創出する場になれば

と考えています。」

新旧住民に加えて、学生など一時的な住民の住む筑波地域には、「複雑な故郷意識」があると船山さんはいう。「古くからつくばに住んでいる人にとってつくば市は

一般的に言う故郷であることは間違いありません。一方、大学生や研究者、各種企業への出向者、留学生などは、つくば市を生活拠点としながらも滞在の期間は一時的であり、その後は日本各地、世界各国へと散らばってしまします。こうした短期の住民にとっても、つくば市は、「知のふるさと」として第二の故郷であるという意識は存在します。古くからの住民と、一時的滞在の住民は、それぞれふるさと意識を持つていながら、生活の背景や環境が異なるために、「ふるさと」についての共通理解が得られていないのではないかと思います。こうした複雑な故郷意識をそれぞれが認識し、共通理解を構築していく場として『ゆいまつり』が機能出来ると思っています。」

船山さんたちのグループは今、3月の『ゆいまつり』実施に向けて、筑波大学や筑波学院大学と協議をすすめてつくば市やつくば市商工会、センター地区活性化協議会、つくば市社会福祉協議会などをまわって協力を呼びかけるなど、精力的な活動をしている。

船山さんはまた、

「毎年、年末年始に実家のある故郷に帰省するように、つくば市を第二のふるさととする人々が、毎年『ゆいまつり』に合わせてつくばに戻り交流を深める、そのようなイベントを目指しています。」と語ってくれた。

§…… 学校における地域学習

地域の子どもたちに、地域について学習したりふるさとを研究したりという「地域学習」は、学校ではどう行われているのだろうか。茗溪学園の場合を尋ねてみた。

茗溪学園は、茗溪会の100周年に際してつくば市に創立された中高一貫の学校である。学園が開校されて以来つづいている行事として、「筑波山キャンプ」がある。中学2年の学年行事で、32回目となる今年は9月8日(木)か

ら3泊4日の日程で行われた。

茗溪学園教頭の吉田潤先生は、この行事を次のように説明してくれた。

「筑波山麓にある県立中央青年の家を宿泊地とする3泊4日の宿泊行事です。宿泊地までは学校から約20キロの道のりがあり、班ごとにルートを決めて徒歩でキャンプ地に向かいます。キャンプ地ではテントを設営して4日間のテント生活を送ります。もちろん食事も野外炊飯ですから、生徒たちは生活の基本を訓練することになり、生徒は集団生活をとおして規律や協力を学びます。それだけではなく、体育科の指導でオリエンテーリングを周辺地域で行い、また、理科と社会科に関連したフィールドワークを行うなどの学習活動をやっています。



農業巡検の茗溪学園生徒たち

ば昔の人が凶作に備えて建てた「郷倉」や、宇宙をかたどったとされる「五輪塔」などを見学し、棚田や扇状地の果樹園を観察して記録している。「筑波というのはアイヌ語でとがった山という意味。昔、神の山といわれたくさんの人が来た。万葉集にも27句のうたがある」と、これは、ある一人の生徒の感想文である。

こうしたフィールドワークを通して、地域の自然と歴史・地理を理解するという「地域理解」「郷土学習」の効果をあげていることがわかる。

茗溪学園の取り組みとしてもう一つ、

吉田先生は高校1年の「農業巡検」をあげてくれた。

「農業巡検は必修科目の『現代社会』の学習の一環として行われ、今年で15年目になります。今年は9月29日(木)に、学校の近隣、つくば市、阿見町、石岡市、

いる。その感想文から――。

「農家の方たちはより多くの人たちにおいしい野菜を食べてもらいたいがために肉体的にも精神的にもつらい農作業を長時間続け、いろいろな苦勞を乗り越え工夫して農業を続けてきたのだと思うと、とても感動した。」

「この体験を通じて、これからは食べるものに注意を払い、どこで誰がどういう風にして作ったり売ったりしているのか、考えながら食べようと思います。」

「つくば付近の近代化は最近目覚ましく、TX駅の付近の開発、バスなどの交通網の発達などの速さに驚きます。……その裏にはこうした(用地買収による耕作放棄や土地の奪い合いなどの)問題がある。」

「農業の悪い点も良い点も知ることができました。人手不足は深刻な問題だと思いました。このまま地球温暖化が進んだら農家はもつと生活が厳しくなってくると思っています。日本の自給率をこれからもつとあげていくために国も何か対策を考えるべきだと思います。」

「農業の視点から地域社会を考える」という目的のもとで実施されたこの野外実習では、現代の日本の農業問題を、食糧の自給率、農産物の安全性、生産者と消費者の提携などのテーマから、機械化の問題や地球温暖化などについて考えを深めている。それは、実際に農作業を体験する中から、働く人々の喜びと悩みを再発見し、日本の農業と政治を考え、さらに地球規模の問題へと関心をひろげているものである。

吉田先生は、「出来上がったレポートは、お世話になった農家にもお渡しして読んでいただきますが、かえって感謝されることが多いんです」と話されていた。

筑波山を仰角30度に仰ぐ人々の暮らす地域での「ふるさとづくり」を、地域の祭り、地域の文化財、地域の歴史、そして子どもたちの地域学習を手がかりとして取材してきた。それらに取り組む人々には、この土地への愛着の心が芯にある。またこれらの取り組みの活動に、筑波大学および学生・卒業生が少なからず関わっていることも、大きな発見であった。

学に関連して、岩石の種類や特徴の調査、放射線測定なども体験しました。社会では、地形図を読み取って土地利用状況を実際に確認し、また、この地域は果樹栽培が盛んなので梨園を訪ねました。周辺には古い民家や歴史的施設、石造物もあり、社会的な視点から観察できるようにしています。これらの活動を経て各自でレポートを作成して提出させます。夜はキャンプファイアーなど楽しいイベントを体験しています。」

参加した生徒たちは、フィールドワークの中で、例え

八千代市などの農家の生産者団体(JAつくば市谷田部営農センターなど4カ所)の協力をいただいて実施しました。当日は班ごとに分かれて専業農家を訪問、農作業の実体験をしたあと午後は各班のテーマに従って農家で聞き取り調査をします。」

生徒たちのレポートを見せていただいた。さすがに高校生、しいたけ栽培の農家や、小松菜、ピーマン、ゴボウなど野菜栽培の農家のお手伝い作業をしたあと、農家の人に率直な質問をぶつけて豊かなレポートを作成して

(文責・事務局)

「図書館学校」創設90周年

記念事業を多彩に開催

図書館情報学橋会 会長 森 茜



上：阿刀田 高氏
下：寺田 光孝氏

第一部

式典及び記念スピーチ

式典では、主催者を代表して筑波大学大学院図書館情報メディア研究科の植松貞夫研究科長が挨拶するとともに、茗溪会の西野虎之介理事長から来賓挨拶がありました。また、国立国会図書館の長尾真館長及び日本図書館協会の塩

見昇理事長からの祝電が披露されました。

続いて、図書館情報大学の創設の頃からの状況に詳しい寺田光孝筑波大学名誉教授より、「図書館員教習所から九十年を振り返って」と題して記念スピーチがありました。このスピーチにおいて、図書館員教習所が、第二次世界大

戦の一時期を除いて、ずっと継続して発展して図書館情報大学となり、2006年に筑波大学に統合し、今の研究科及び学類に変遷したことが紹介されました。寺田光孝氏は「図書館学校」が発展した90年の歴史をみると、その時代々に学校の名称が変更され、その名称をたどるとあたかも短編集のように、図書館情報学の発展そのものの変遷が示されていると、指摘しました。

第二部 記念講演と朗読

記念講演は阿刀田高氏、朗読は阿刀田慶子氏によって行われました。

阿刀田氏は、前身学校「図書館職員養成所」の卒業生で、日本ペンクラブ会長も務めた直木賞作家です。阿刀田慶子氏は阿刀田高氏の夫人で朗読の達人です。当日は、阿刀田高氏の短編

「あやかしの声」が情感豊かに朗読されました。「あやかしの声」は森閑とした大きな図書館の地下書庫で幻想の



阿刀田慶子さんの朗読

覧するなど、「図書館学校」創設90周年記念事業は成功裏に終了しました。

記念展示「知識情報とメディアの世界」

日時 平成23年10月3日(月)～10日(月)
場所 筑波大学春日キャンパス
情報メディアユニオン棟1階

この展示会は、上述の三者に加えて筑波大学附属図書館も共催に加わりました。

この展示会では、筑波大学附属図書館の分館「図書館情報学図書館」が所有する、古代の粘土板から現代のデジタルメディアに至る貴重な情報媒体資料が展示され、知識情報とメディアの歴史の変遷が分かりやすく概観されました。

また、貴重な写真等により「図書館学校」の90年の歩みが視覚的に紹介されました。

記念式典・記念講演会には学内外から約200人が参加し、記念展示会には山田信博筑波大学長も観

記念式典と記念講演会

行事Ⅰ 記念式典と記念講演会
行事Ⅱ 図書館記念展示会

茗溪会支部である図書館情報学橋会は、平成23年10月9日(日)の筑波大学ホームカミングデーを中心に、筑波大学春日キャンパスで「図書館学校」創設90周年記念事業を多彩に開催しました。

これは、筑波大学の大学院図書館情報メディア研究科及び情報学群知識情報・図書館学類の前身校である文部省図書館員教習所が大正10年(1921年)に創設されてから、今年が90周年になるのを記念して、支部図書館情報学橋会が、筑波大学の同研究科及び同学類と共催で実施したものです。

行事は大きく分けて次の2部で構成されていました。

日時 平成23年10月9日(日)午後
場所 筑波大学春日キャンパス講堂

第10回（平成23年）

茗溪会顕彰

第10回目を迎えた茗溪会顕彰として、11月25日に東京・茗溪会館で顕彰式と祝賀会を行った。社団法人茗溪会顕彰選考委員会により、全国から6団体と個人5人が今年の顕彰対象となった。この事業は、地域社会で広く社会に貢献している青少年や一般社会人を顕彰するという茗溪会の公益事業の一環である。

この日顕彰状を授与した茗溪会西野虎之介理事長は、「私どもの顕彰活動は、ごく日常的で継続的な社会貢献活動を対象にしているので、社会的に意味のある働きかけになることを期待している」と述べた。

祝賀会での受彰者のスピーチでは、「子どもたちと遊んでいるだけで楽しいのですが、心が折れることもあります。この顕彰によって、がんばれと言っていたいただいたようでとても励みになります」などのお話があった。

顕彰受彰者紹介

（順不同・敬称略）

……団体……

北海道札幌工業高等学校

サーケン同好会

代表生徒 相原裕希也

北海道

◆授業で学んだ「ものづくり」の技術を活かして人の役に立つ

札幌工高建築研究会（略称サーケン）の生徒たちは、学校で学んだ建築に関わる技術を活かし、夕張市の幼稚園児に木の端材で作ったカスターネットや動物を形取ったコロナおもちゃ、キリンやゾウの等身大の模型、木製ソーラーカーなどを提供、道立図書館や競技場へは移動式テーブルベンチを贈るなど、地域との交流を深めてきた。



サーケン同好会 公園で



学び場さくら塾



自然生クラブ 収穫の時



バドミントン部 感想文を書く子どもたち



長浜高校の水族館

筑波大学生による

学び場さくら塾

代表 金岡孝浩

茨城県

◆地域の子どもたちと学生が、共に学びあう塾

教育への熱い思いを抱いた筑波大学のボランティア学生が、地域の小中学生に算数、英語などを教えている。子どもたちの「なんで？」などに一つひとつ応えることを大切にしている塾の個別学習は、子どもたちの理解力の深まりにつながることも、学生が指導力を学ぶ場にもなっている。

自然生クラブ

代表 柳瀬 敬

茨城県

◆誰もが自分らしく生きる場を、自然との共生を

知的障害者との共同生活で、誰もが人間らしく生きる場「づくりのために、生ゴミの堆肥化、森林保全のための炭焼き、自然エネルギーの活用など地域循環農業を営んでいる。トラックに乗って太鼓を叩きながら野菜販売を行う中で、和太鼓演奏、創作田楽舞に取り組み、「才能を引き出す」表現活動をすすめ、海外公演も行った。

バドミントン部

代表 久保友春

筑波大学

◆バドミントンによる大学生と小中学生との交流

地域の子どもたちに、バドミントンの競技力向上やチームワークづくりなどの普及、振興活動を行っている。活動は中学校やつくば市内のバドミントンクラブで小中学生を対象に行い、技術指導をとおして人間性の向上を目指すボランティア活動として、地域に貢献するものである。

水族館部

代表生徒 大野雅一郎

愛媛県

◆生徒による水族館運営、町のネットワークづくり

平成11年、生徒たちは長浜近海等の海洋生物を飼育する日本初の高校内水族館「長高水族館」を設立した。生物の命の尊さや自然環境について学ぶなど、町の子どもたちの環境教育の場を提供した。このような高校生に触発されて、長浜町では町立水族館の再設置計画がはじまっている。

大分県立中津南高等学校耶馬溪校

科学部

代表生徒 江島裕太

大分県

◆「ホテル授業」により美しく故郷「耶馬溪」を守る

科学部員は「残しておきたい自然に学ぶ」という視点で、小学生の《先生》となって教壇に立ち、ホテルの生態や飼育方法を教える「ホテル授業」を実施している。「耶馬溪町の自然とホテルを守りたい」との気持ちから、地域河川の清掃など行いながら、地域をあげての環境づくりに貢献している。

……個人……

穴原 奈都

東京都・三宅島

大宜味詩野

◆島全体が自分の家 島に新しい風を吹かせたい

穴原姉妹は、11年前の三宅島雄山の噴火による全島避難時は中学生であったが、帰島後、「島を味わってもらいたい」との思いから「ギャラリー・カフェ」を開店（平成22年）、現在は妹の詩野さんが経営している。姉の奈都さんは、「キッズサマースクール」の企画・運営のチーフリーダーとして参加し、島の活性化のために貢献した。

藤井いづみ

茨城県

◆子どもたちと「お話」の世界で心が通い合う瞬間

幼い日に聞いた「ドキドキ、ワクワク」した昔話の素晴らしさを子どもたちに伝えたいと、昔話や童話を読み聞かせる活動を35年来続けている。

自宅に「まめの木文庫」を開設するとともに、市民大学「昔ばなし大学」の講師として活躍している。「心から物語を楽しむ体験が大切！」との思いを全国的な規模へと広げている。

木原 洋一

神奈川県

◆地域の子どもたちに体を動かす楽しさを伝えたい

木原さんは、筑波大学大学院で専攻した「スポーツ教育学」の学びや研究の成果を活かし、ボランティア活動として横浜市内に体操教室を開設している。地域の子どもたちを対象に、月3回程度、長なわや体操など様々なスポーツをバランスよく体験させ、心身の健全育成を目指している。また、教職を目指す学生を対象に、指導体験の場としても活用している。

久保 智

神奈川県

◆心のぬくもりを指先から人へ

幼いころから目が不自由というハンディに負けず、4歳からピアノ練習を始め、武蔵野音楽大学を卒業後演奏家として活躍した。その一方、老人ホーム等でのボランティア演奏に取り組んできた。重い病気に悩む親友を楽にしたいとの思いからマッサージを学び、治療活動のほかに老人ホーム等への訪問マッサージや施設にあるピアノを弾いて高齢者に心の癒しをもたらしている。

メアス 博子

カンボジア

◆子どもたちの自立をめざし、カンボジアで孤児院

平成9年にカンボジアを訪れ、平成12年から孤児院の運営に参加した。現在は、戦争孤児等の子どもたちを預かる孤児院「スナードイ・クマエ」の代表・運営責任者である。母親代わりの役割も担って、基本的生活習慣の指導や日本語教育、英語教育さらに絵画教室などを実践し、子どもたちが将来、自立していくための力強いサポートになっている。



科学部のホテル授業



穴原姉妹のキッズサマースクール



藤井いづみさん



木原洋一さんの体操教室



久保 智さんの演奏



メアス博子さんカンボジアでお茶会

茗溪会／秋の公開講座から

筑波で開催

絶滅を生き延びた生物

講師 上松 佐知子（筑波大学准教授）

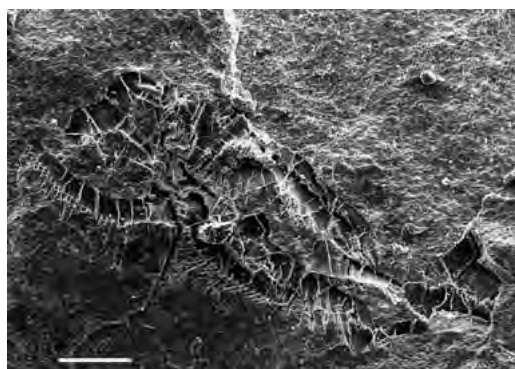
10月29日（土） 筑波大学 大学会館にて

化石を研究すると何がわかるでしょうか。示準化石、示相化石という言葉は中学や高校の地学で習った人も多いことと思います。前者は地層や堆積岩の年代を決める化石を指し、後者は生物が生息していた当時の古環境を表す指標となるものを言います。また化石は生物進化を説明する上では欠かせない存在であり、進化と表裏一体である絶滅現象についても同様のことが言えます。今回は普段あまり馴染みがない微化石の観点から、この絶滅事件について解説します。

顕生代には5回の大量絶滅事件が知られています、いずれも生物種の60〜90%以上が地球上から姿を消した大事件でした。特に有名なものが、恐竜を絶滅に追いやった白亜紀―古第三紀（K/Pg）境界と史上最大の絶滅事件であるペルム紀―三畳紀（P/T）境界でのイベントです。ところでこのような地球表層圏の歴史Ⅱ地史を解明するためには、調査対象となる地層の年代を決定しなければ研究が始まりません。ここで示準化石が重要となります。示準化石も生物ですから、もちろん大量絶滅事件で大打撃をこうむったはずで、絶滅事件の研究が難しいのは、示準化石がなかなか産出しない（その時代の地層が保存されていたとしても、時代を示す証拠が無い



ため研究対象とならない）ことが大きな理由のひとつになっています。K/Pg境界におけるこの問題の解決にあたって脚



岩石中に含まれるコノドントの雌型化石。スケールは0.2mm。魚の“歯”が岩石に押し付けられた痕が見える。

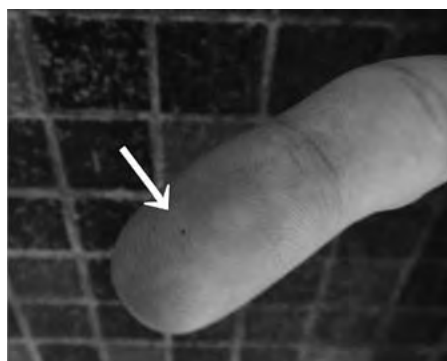
説が提唱されてから決着がつくまでの間に、膨大な量のデータと証拠が集められ精査されましたが、その基本となる地層の年代決定に用いられたのが微化石のひとつ、有孔虫でした。肉眼で見える大きな生物が軒並み絶滅し、生き延びた生物も個体数が激減している状況において、有孔虫をはじめとする微化石は示準化石として実に有効に働きました。これらの小さなデータの積み重ねが、大量絶滅事件解明の一端を担ったのです。

さてP/T境界の絶滅では、何が示準化石として有用なのでしょう。このイベントを生き残った生物はK/Pg境界よりもはるかに少なかったと考えられます。その中で個体数が比較的多く、世界中の地層から産出するものを示準化石として選定しなければなりません。このような条件を満たす生物は、コノドントという原始的な魚類の一種と、頭足類の仲間であるアンモノイド類のみと考えられています。現在P/T境界の研究はK/Pg境界です。恐竜絶滅の謎に迫ったときと同様に今、古生物学

者による示準化石の研究を踏み台にしてP/T境界絶滅事件の全容が明らかになりつつあります。

近年、日本の付加体地域から遠洋深海性のP/T境界層が相次いで発見され、注目を集めています。付加体は日本列島のようなプレート収束域に特徴的な地質体で、かつて古太平洋のはるか沖合で堆積した堆積岩を主要な構成要素としています。付加体のP/T境界層では、前述のコノドントが最適かつ唯一の示準化石となります。コノドントは歯のみが化石として保存され、その大きさは1mmに満たないため微化石として扱われます。P/T境界層の堆積岩からコノドントを発見するには、まず岩石を1〜数cm大に砕き、次にそれらの表面を顕微鏡で限なく観察しなければなりません。このような単純ですが気の遠くなる作業を経て、日本では数箇所目となるP/T境界層が岐阜県丹波山地域から確認されました。この地層に保存されていたコノドントはこれまでに知られているものとは異なり、本体の存在しない雌型化石でした。現在、精密機械の観察等に使用されるマイクロCTスキャン装置を用いてこれらの分析を進めています。今回発見した化石は、時代も産状も世界に類のない珍しい標本であるため今後ますます注目を浴びると思われます。

P/T境界層を含め、大量絶滅時に形成された地層は案外身近に存在しているかもしれません。それらの地層は真っ黒でぼろぼろで、一見気に留める必要もないような岩石に見えます。しかしこれらの岩石を微化石の視点から観察することで、意外な大発見に繋がる可能性があるのです。



指の上に乗せたやや大型のコノドント化石

【藤原教授の英語のはなし】第4弾

平安時代の英語は面白い

講師 藤原保明（筑波大学名誉教授）

11月12日（土） 筑波研修センターにて



「藤原教授の英語のはなし」のシリーズは、二年前「誰が英語を作ったか」、一昨年「日英ことば遊び入門」、昨年「単語はここが面白い」につづき、今回が第4回目となった。研修センターで行われた公開講座の内容は以下のとおりである。

*

1 平安時代概観

平安時代は桓武天皇が京都に都を移した794年から、源頼朝が1192年に鎌倉幕府を開くまでの約400年間である。平将門や藤原純友の乱、前九年の役、後三年の役、保元・平治の乱などの騒乱、源氏の台頭と平家の滅亡など、武家や貴族の栄枯盛衰の時代であった。一方、仏教は空海、最澄、源信、法然、栄西などにより興隆し、さらには貴族を中心とする王朝文化の花も開いた。なかでも、古今和歌集や山家集などに代表される和歌、枕の草子などの随筆、源氏物語、竹取物語、伊勢物語、大鏡などの物語、和泉式部日記、更科日記、紫式部日記など、

多くのジャンルで優れた作品が続々と生まれ、日本文化が文芸面でも熟成しつつあったことが窺える。

2 平安時代の頃の英国

英国では8世紀末から七つの王国が統一されつつあったが、一方では、北方から侵攻したデーン人がヨーク王国を建国するという憂うべき事態も生じていた。デーン人は878年に締結された条約によって、テムズ川以北に定住するが、彼らの来襲はその後も激しさを増し、1016年には彼らの王、クヌートが英国王に選ばれ、またその50年後には英語を解さないノルマンディー公ギヨームがウィリアム一世として英国の王位につくというノルマン人の征服がおこった。以後、英国はフランスの政治・経済・文化の強い影響を受け、言葉の面でもフランス語が支配的となった。もともと、ウィリアム一世の没後、子孫が数世代にわたり王位をめぐり骨肉の争いを続けたことから、国内は混乱した。各地の修道院はデーン人により焼き討ちされ、貴重な文献の多くは焼失・散逸した。また、英国の東北部に定住したデーン人は文化的にもアングロ・サクソン人と大差なく、さらに、ノルマン征服後の政情不安の中では独自の豊かな文化の形成は進まなかった。このような状況にあった英国で今日まで伝わる記録は、デーン人の襲撃を免れた南東部を主とする修道院で記されていた年代記、説教集、聖書の翻訳、文芸作品などである。この中には、英語の最古の叙事詩『ベオウルフ』、1154年までの記録が残る『ビータバラ年代記』、デーン人との戦いに大敗した直後の韻文『モールドンの戦い』などが含まれる。

3 平安時代の頃の英語

731年頃に高僧ベータがラテン語で書いた『英国民教会史』はアルフレッド王によって9世紀末に英訳された。それを見ると、現在では用いられない文字がいくつかあり、綴り方も発音も今とは異なり、逐語訳しても文意が把握できないほど、当時の英語は現在の英語とかけ離れている。ところが、『ビータバラ年代記』の1137

年の記録を見ると、語形は以前より崩れているが逐語訳すると内容が掴めるほど、語順は今の英語に近づいている。もともと、詩の言葉は保守的であり、韻律を整えるための特別な造語も多く、通常の語順が変化するということもあることから、10世紀末の『モールドンの戦い』の英語は逐語訳では大意は掴みにくい。ところが、この詩では主語+目的語+動詞という現代英語では廃れた語順がかなり多く見られ、日本人には逐語訳でも理解できる。平安時代は、古英語の主語+目的語+動詞という語順が現在の主語+動詞+目的語という語順に変化する過渡期にあたる。

4 英語の転換期

平安時代は英語が大きく変化する転換期なのである。とりわけ、文化水準がほぼ等しく、同じ系統の言語を話すデーン人との共棲は、共通の理解が得やすい語の中心部分は残し、理解しにくい語尾は捨てるという傾向を強め、旧来の複雑な語尾変化は次第に簡略化し、消失していった。この過程の中で、「ア、イ、ウ、エ、オ」のいずれでもない弱くて短い「曖昧母音」と呼ばれる母音を用いる習慣が定着した。この母音の出現は英語の発音・綴り字・語形・音変化・造語・語順など、英語の構造に関わる大変化をもたらすことになる。一方、高い文化を誇るフランス貴族が英国を支配するようになると、大量のフランス語の語彙とフランス語を介したラテン語の語彙が借入され、在来のゲルマン語系の語彙との併用により、微細な表現が可能となった。

平安時代に相当する約400年間に、英語は同じ系統のドイツ語やオランダ語と一線を画し、独自の発達を遂げ、世界の共通語へと発展していく大きな動機が与えられた。その意味において、平安時代の英語は実に面白いと言える。

*

終了後、質疑応答に移り、どうすれば千年以上も前の英語の発音がわかるのか、英語はなぜ大きく変化したのかなどの質問があり、興味深い意見交換ができた。

高坂節三先生を

お迎えして



平成23年10月16日(日)午後2時から芙蓉会と四月会の合同研修会を開催した。本部事務局に申請をして、恒例行事となった公開講座である。今回は前東京都教育委員の高坂先生を講師にお迎えして「日本の高校教育に期待すること」と題して、世界と日本を取り巻く情勢、また、これからの高校教育について等幅広い観点からお話をいただいた。

前半のお話では、グローバル化の光と影、ユースが抱える諸問題、世界情勢とリーダーシップ、労働市場の問題、人材獲得と企業対応の問題、英語学習の問題等まさにグローバルな観点からのお話であった。印象的だったのは、「人件費については、1980年代の改革開放の時代では、日本を1とすると中国は三十分の一だったが、現在ではこれが十分の一になっている」という指摘だった。つまり、中国の人件費が3倍になり、経済活動が非常に盛んになっているということである。後半のお話では、東京都が実施してきた様々な施策、教員のマネジメント、家族のあり方、不易流行、リベラ

ルアーツ等が話題になった。「日本の家族の絆が失われているのか。家庭はあらゆる組織の基本である。次に地域社会、その次が国家である」という指摘が心に響いた。この後に質疑応答の時間をいただいた。最初に、「ゆとり教育の弊害はあったのか」という質問が出されたが、これに対しては、「旧制高校の教育内容はある意味でゆとりであったと考えている。確かに保護者の不満はゆとり教育に対してあった。児童・生徒が自分でものを考えると言う点では今一歩だったと思っている。しかし、一定の成果はあったと考えている」という回答であった。次に「日本のメディアのあり方はどうか」という質問に対しては、「もう少し教養的な内容を増やせないか。新聞記者の質問は、もっと施策に切り込むような質問をしてほしい」という回答をいただいた。

午後2時からの公開講座は4時近くに及び、この後教育懇談会に移った。懇談会では、高坂先生を囲んで懇親を深めながら、さらに高坂先生の講演内容について質問が出るなど大いに盛り上がった。

平成二十三年秋の叙勲

おめでとうございます(敬称略)

旭日中綬章

西野虎之介 28教大農経

瑞宝中綬章

伊藤 達夫 31教大地 34院修地

小宮 定志 29教大植 31院修植

清田 賢 39教大法政

関口 茂久 30教大心 32院修実心

吉原 健一 33院修数

(茨城)

(三重)

(東京)

(兵庫)

(滋賀)

(神奈川)

旭日小綬章

新堂 庄二 24理四 25研

瑞宝小綬章

森 吉人 27文二

佐竹 眞義 37教大体

荒木 善行 29教大体

池田都實康 40教大日史

橋本 恭明 40教大倫

伊藤 恒之 33教大漢

大木 健夫 33教大数

荒井 淳雄 28教大数

多湖 實松 39教大体

井上 弘之 30教大体

(大阪)

(北海道)

(宮城)

(山形)

(茨城)

(埼玉)

(千葉)

(東京)

(愛知)

(福岡)

平成二十三年春の叙勲

おめでとうございます(敬称略)

追記

瑞宝中綬章

福田 紀夫 39教大教

瑞宝小綬章

吉田 鵬次 32教大農経

豊田 治規 30教大体

(東京)

(岩手)

(香川)

お願い 旭日小綬章以下については全国紙に掲載されませんので支部、本人から連絡があった方のみを掲載しています。記載もれにお気付きの方は事務局までお知らせください。

茗溪学園だより

茗溪学園美術展 30回を迎える

豊かな情操を育む教育プログラムとして、本校では芸術に親しむ機会を数多く設けています。そしてこの「茗溪学園美術展」は最も大きなイベントといえるものです。開校四年目の1982年に土浦市の「小網屋」デパートの展示場をお借りして第一回が行われ、以来、土浦からつくばの「茨城県つくば美術館」へと会場を変え、今年30回を数えました。

この美術展は、本校美術科の一年間の生徒授業活動の発表の場であり、美術部、書道部、写真部の作品展示の場でもあります。加えて、保護者、教員、卒業生からもしばらしい作品を出展していただいています。今年は特に第30回企画展として美術分野の各方面で活躍している卒業生に声をかけ、多く作品を出展してもらいました。

本校の美術授業では、油絵、日本画、彫刻、版画など10種類以上の表現方法を学びます。生徒達はさまざまな方法で多くの作品を制作しながら、表現の技能を高めていきます。そして生徒それぞれの感性が豊かに育まれて



ギャラリートークで作品について説明する卒業生

いきます。作者の心の表現である創作活動、その過程で自分の心を見つめ「他と共感する心」を育むこと、これが美術科の指導の狙いといえるものです。
展示総数は1400点余り、六日間の期間中の来館者数は2000人でした。最終日にはギャラリートークが行われ、美術部の生徒を含め

たご来館の方々に前に、保護者、卒業生、教職員、高校2年美術部員らが展示作品の解説を行います。今年は、各分野で活躍する卒業生の作品解説があったこともあり、現役生徒達には特に刺激となった美術展でした。

SSH・多くのプログラムが進行

本年度よりスーパーサイエンスハイスクール(SSH)となり、「GETプロジェクト」に取り組んでいます。夏休み以降の活動をご紹介します。

主にE(Explore)プログラム(探究活動)とG(Glob-
e)プログラム(国際的な科学研究に繋がる活動)とな
っています。科学部の生徒や関心の強い希望生徒を対象
とした活動で、意欲的な生徒たちが集まり、初年度では
ありますが活気のある取り組みとなりました。

① オーバーナイトスタディ「天文学入門in長野」

長野県小川天文台において天体観測、講義および実習
を行いました。参加者は天文部員と希望生徒合わせて25
名、初心者向けプログラムということで、「一等星マラソ
ン」「惑星(木星)観測」「星雲・星団観測」「黒点観測」「望
遠鏡の発達(講義)」などの活動が行われました。(10月29
日~31日実施)

② ジオツアー「つくばの土地の成り立ちを考える」

池田宏先生(元筑波大学陸域環境研究センター)が講
師・案内役をお引き受けくださいました。表題の通りつ
くばの土地の成り立ちについて現地を巡りながら学びを
深めました。(12月11日実施)

③ SSメディカルセミナー

医学・医療系への進路希望者を対象に、教養講座とし
て大学訪問や講演会などへ参加していきます。今年度は
5回の実施計画ですが、現在のところ3回まで進んでい
ます。第1回(11月25日)県立医療大学訪問(模擬講義、
校内見学など。第2回(11月30日)筑波大学総合医療科主
催のドクターG.Tへの参加。第3回(12月27日)茨城県主
催国立水戸医療センター見学会参加。この後は、卒業生
を活用した講演会などを予定しています。

④ SAT受検

SATはアメリカの大学進学適正テストです。本校は

SATテストセンターの認定を受けており、校内で受検
できます。サブジェクトテストのうち、生物、化学、物
理、数学から2科目を選んで32名の生徒(高1・高2)
が受検しました。(12月3日)

⑤ インターナショナルサーベイツアー&レクチャー

海外での調査研究活動で、生物・地学分野としフィ
ールドをアメリカ・デスバレーにしました。多くの希望者
から選抜された6名の生徒が参加します。フィールド調
査後は、UCサンフランシスコ(大学)で化学実験を行
う計画です。(1月9日~14日)

⑥ 科学展などへの出展・受賞

個人課題研究をさらに発展させ様々なコンテストに応
募し、成果を上げる生徒が出てきました。二つ紹介いた
します。JST主催「未来の科学者養成講座」で慶応大
学での研究実験をすることができた生徒が、全国発表会
で受講生大賞銅賞及び審査員奨励賞を受賞しました。個
課研のテーマは、「アトピー性皮膚炎治療」核酸医薬デ
コイヌクレオチドを用いてです。慶応大学では、ハ
ダカデバネズミ研究チームに参加させてもらい、iPS
細胞の研究をすることができました。

二人目は、南極北極科学コンテストでの優秀賞受賞で
す。「極地がもたらす気候変動を探る」というテーマで研
究していましたが、この研究から発展した提案書を同コ
ンテストに応募した
のです。

他にもつくば科学フ
ェスティバルへの出展
や、県の児童生徒科学
研究作品展への出展・
受賞など、積極的に参
加するようになってき
ました。ますます科学
研究への関心を高め、
内容的にもレベルが高
くなるように活動を展
開していきたいと思
います。



オーバーナイトスタディ

講師の先生に質問する生徒たち(小川天文台にて)